

オリッサ州ウダヤギリⅡ出土の 石刻陀羅尼について

田中 公明

(1) はじめに

筆者は、インドにおいて仏教が最後まで残存していたパーラ朝治下のビハール・ベンガルや東海岸のオリッサ州を中心に、インド密教と仏教美術の調査を進めてきた。その中でもオリッサは、2003年の初訪問以来、2007年からは、ほぼ毎年のように現地に入って遺跡の調査、美術品の撮影、資料の蒐集、オリッサで再発見された仏教徒カーストや現地で活動する仏教教団の現況などを調査してきた⁽¹⁾。

今回はその中から、ウダヤギリⅡ遺跡から発見された石刻陀羅尼について、その概要を報告することにした。なお筆者は、2013年2月1日から3日までウダヤギリとラリタギリで開催された国際学会、International Conference on Buddhist Heritage of Odisha: Situating Odisha in Global Perspectiveにおいて、その概要を報告しているが、同学会は、立ち遅れているオリッサの仏教遺跡の観光開発に主眼があったため、学術発表は一人あたりの発表時間が僅か5分しかなく、十分に論旨が展開できなかった。また論文集刊行⁽²⁾の目途もたっていないので、その内容を大幅に増補改訂した論文を本誌に寄稿することにした。

(2) ウダヤギリⅡ遺跡について

今回取り上げるウダヤギリ遺跡は、インド政府考古局 ASI により 1958 年から発掘が進められ、四方に四仏を安置する大塔をはじめ多数の遺構が出土し、日本の学界からも広く注目を集めてきた⁽³⁾。

ところが 1997 年から、新たに遺跡の東南側で発掘が始められ、従来知られていた大塔や中央祠堂を中心とする部分に匹敵する遺構が姿を現した。インド政府考古局は、これを発掘の順序からウダヤギリⅡと名づけたが、出土品から見ると、インド中期密教（7～8 世紀）を代表する仏教図像が多数出土した大塔や中央祠堂周辺に比して、ウダヤギリⅡからは、それより一時代早い初期密教系の尊像が多く出土している。したがって年代的には、ウダヤギリⅡはウダヤギリ中心遺跡より古くから存在していた可能性が高い。（写真 1）



写真1 ウダヤギリⅡ遺跡（筆者撮影）

(3) オリッサの石刻陀羅尼について

ウダヤギリⅡの発掘は多数の新知見をもたらしたが、その中でも2001年から02年にかけて第2僧院の東側で発掘されたコンダライトの石刻陀羅尼(Reg. No. 70)は、全21行の保存状態がよく、貴重な遺品といえる。なおこれに先立つ1997年から2000年の発掘でも、13点の石刻陀羅尼が出土していたが⁽⁴⁾、何れも断片化しており、全文が判読できるのは本作品以外にはない。すでにインド政府考古局は、発掘の調査報告において碑文表面の写真とローマ字化テキストを公表している⁽⁵⁾。(写真2)

筆者は一見して、碑文に記されている陀羅尼が、アジア各地で代用舍利とし

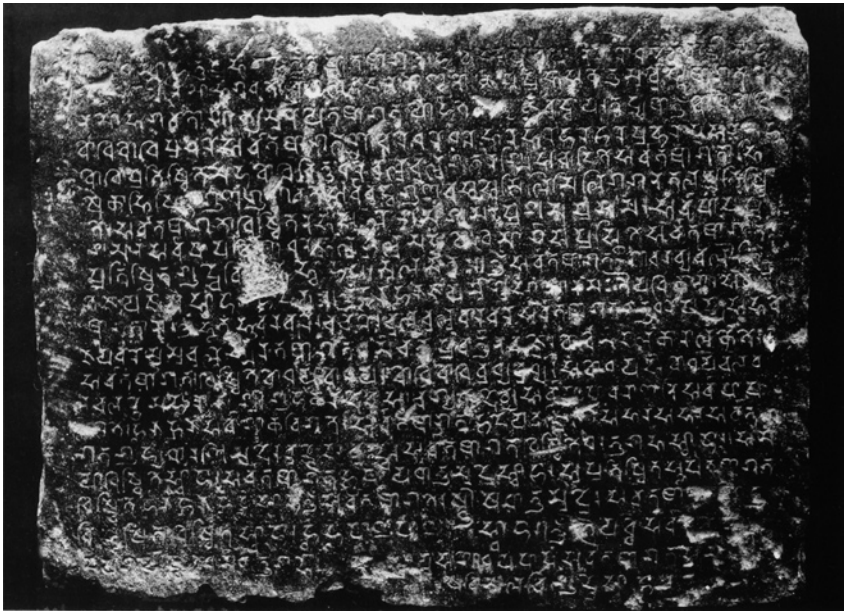


写真2 ウダヤギリⅡ出土の石刻陀羅尼 (“*Indian Archaeology 2001-02 A Review*”, New Delhi 2008 より転載)

て広く尊崇された『宝篋印陀羅尼』 *Ārya-sarvatathāgatādhiṣṭhāna-hṛdaya-guhyadhātu-karaṇḍa-mudrā nāma dhāraṇī* に類することに気づいた。同陀羅尼には3種の漢訳⁽⁶⁾と1種のチベット訳⁽⁷⁾が伝存する。また我が国には、悉曇による梵字転写も伝えられている⁽⁸⁾。

オリッサからは、他にも陀羅尼を記したコンダライトの石刻碑文が発見され、現在はブバネーシュバルの州立博物館に展示されている。この石刻陀羅尼は、すでに G. Schopen によって『菩提場莊嚴陀羅尼』に同定されている⁽⁹⁾。これに対して『宝篋印陀羅尼』の石刻は、スリランカから発見されているが⁽¹⁰⁾、オリッサだけでなくインド国内からは1例も出土していなかった。

ところが今回、新たに同定された『宝篋印陀羅尼』を他の出土品と比較したところ、1997年から2000年にかけて出土した13点の石刻陀羅尼断片のうち、少なくとも5点が「如来法身偈」『宝篋印陀羅尼』『菩提場莊嚴陀羅尼』を連写したものであることが判明した。また1958年からの発掘で出土し、現在も遺跡に置かれている四臂観音像の背面に記された銘文⁽¹¹⁾も、「如来法身偈」『宝篋印陀羅尼』『菩提場莊嚴陀羅尼』等を連写したものであることが判明した。

そこで本稿では、ウダヤギリⅡ出土の石刻陀羅尼を漢訳・チベット訳と比較するとともに、インド仏教史におけるこの発見の意義について考察を加えたい。なお石刻陀羅尼と漢訳・チベット訳との比較については、次頁の表1を参照されたい。

(4) 石刻陀羅尼の内容

問題の石刻陀羅尼は21行に亘って記されている。冒頭には「如来法身偈」(ye dharmmā hetuprabhavā…) が記され、つづいて2行目から、前述の『菩提場莊嚴陀羅尼』が始まる。オリッサ州立博物館の石刻碑文と比較すると、オリッサ州立博物館の『菩提場莊嚴陀羅尼』は冒頭部分を欠いている。しかし両者は、

オリッサ州ウダヤギリ II 出土の石刻陀羅尼について

表1 ウダヤギリ II 出土の石刻陀羅尼の構成

陀羅尼	行	大正蔵 (Vol.19)	影印北京版	デルゲ版(カルマ派版)
1. 如来法身偈	1			
2. 『菩提場莊嚴陀羅尼』	2	671b	Vol.6,149-2-2 ～ 151-1-1	rGyud,Na,7b4-6
1) 心呪 hr̥daya	9	674b	Vol.6,151-1-1	rGyud,Na,7b6
2) 隨心呪 upahr̥daya	10	674b	Vol.6,151-1-1	rGyud,Na,7b7
3. 『宝篋印陀羅尼』	10	711c; 713c-714a; 717a-b	Vol.6,153-4-1 ～ 4-8	rGyud,Na,6b7-7a3
4. 『無垢仏頂陀羅尼』	19	724a	Vol.7,184-4-4 ～ 4-5	rGyud,Pha,254b7-255a1

根本陀羅尼 *mūlamantra* の後に、心呪 *hr̥daya* と隨心呪 *upahr̥daya* をあわせて記す点が共通している。ただしオリッサ州立博物館の石刻陀羅尼で、隨心呪の後に記されていた陀羅尼の利益を説く一文は、ウダヤギリ II 出土の石刻陀羅尼には見られない。

いっぽうウダヤギリ II 出土の石刻陀羅尼では、10 行目から『宝篋印陀羅尼』が始まる。インド政府考古局によるローマ字転写は、陀羅尼の原典を知らなかったため、多数のミスを含んでおり、それがテキストの同定を困難にしていた。しかしこれらの転写ミスを修正すると、従来知られていた『宝篋印陀羅尼』に近いテキストを回収することができた。またウダヤギリ II 出土の石刻陀羅尼や他資料との比較により、日本に流布している浄嚴の悉曇転写にも、かなりの問題点があることが明らかになった。

なお本石刻陀羅尼の最大の特徴は、(14) *calantu* と *sarvapãpa* (sic) *varaṇāni sarvapãpa* (15) *vigate/* の間に、オリッサ仏教の最盛期を築いたバウマカラ王朝の王名 *mahārāja śrīśubhākaradevasya ca śyā[ma]devyā?* が挿入されていることである。なおこの部分は、北宋の施護訳のみ「薩嚩薩怛嚩二合引喃」*sarvasattvānām* が挿入され、「一切衆生の悪と蓋障、一切の悪よりの遠離」となっている。ところが本石刻陀羅尼では、ここに吉祥なる大王 *śubhākaradeva* と、おそらくは妃⁽¹²⁾の名前が記入され、陀羅尼の文句が、王の個人的な滅罪を祈

願するものに変更されているのである。なお前述の四臂観音背面の銘文でも、同じ箇所には何らかの個人名が記入されているが、銘文の状態が悪いため明確に判読できない。

バウマカラ王朝には、8世紀から10世紀にかけて5人の śubhākaradeva が現れている⁽¹³⁾。したがって現段階では、ここに言及された王が何世であるのかは確認できない。しかしこれにより、従来は推定の域を出なかったバウマカラ王朝とウダヤギリの関係が裏付けられたことには、大きな意義がある。この『宝篋印陀羅尼』は、19行目で終わっている。

19行目からは、また別の短編の陀羅尼が記されている。筆者が検討したところ、この陀羅尼は、『無垢仏頂陀羅尼』*Vimaloṣṇīṣa-dhāraṇī*であることが分かった。残念ながら、この陀羅尼のサンスクリット写本は発見されていないが、チベット訳が1編⁽¹⁴⁾、漢訳も1編⁽¹⁵⁾が知られている。石刻碑文に記されているのは、その根本陀羅尼ではなく、仏塔に代用舎利として納入するための短編の陀羅尼⁽¹⁶⁾であることが分かった。なおこの陀羅尼は、オリッサの石刻陀羅尼を取り上げた Schopen 2005 の後半にも紹介されている⁽¹⁷⁾。

(5) テキスト

それでは以下に、オリッサのウダヤギリⅡから出土した石刻陀羅尼のローマ字化テキストを掲載する。なおASIの転写は diacritical marks を用いていないので、diacritical marks を補った上、多数の読みを修正した。{ } で括った文字は不要な重複を示し、[] で括った文字は、筆者が判読不能や欠落している文字を、漢訳やチベット訳、他の石刻陀羅尼等に基づき修補したことを示している。

(1) ye dharmmāhetuprabhavaḥ hetu[ṃ] teṣāṃ tathāgato hy avadat teṣāṃ [ca]

yo ni{ro}rodha evam vādī mahā

(2) [śrama]ṇaḥ// namo bhagavate vipulavadanakāncano[t]kṣiptaprabhāsa-
ketumūrdhnaḥ tathāgatāya

(3) namo bhagavato (sic) śākyamunaye tathāgatāyārhatē [samya]kṣaṃ-
buddhāya/ tad yathā oṃ bodhi bodhi

(4) bodhi bodhi pravare sarvatathāgatagocare dhara dhara hara hara hara hara
prahara prahara mahā

(5) bodhipraṭiṣṭhite maha(sic) bodhicittadhare culu culu śataraśmisaṃcodite
sarvatathāgatābhi

(6) śekābhiṣikte guṇa guṇavate sarvabuddhaguṇa(sic)vabhāse mili mili
gaganatalapraṭiṣṭhi

(7) te/ sarvatathāgatādhiṣṭhitanabhastale śama śama/ praśama praśama/
sarvapāpapa

(8) śamane sarvapāpavi[śo]dhane hulu hulu mahābodhimārgasa[m]prasthite
sarvatathāgatā

(9) praṭiṣṭhitaśuddhe vi[śuddhe] svāhā// mūlamantraḥ// oṃ sarvatathāgata-
gocaravyavalokī

(10) te jaya jaya svāhā// hṛdayaḥ// oṃ huru huru jaya mukhe svāhā// namaḥ
t[r]aiyadh[v]ikānā[m]/ sarva[ta]

(11) thāgatānāṃ/ oṃ bhūtabhuvanavare/ vacare/ culu culu/ dhara dhara/
sarvatathāgata dhātudhare/ padmasambhave

(12) jayavaramudre culu smara tathāgata dharmacakrapravarttanavajre/
bodhimaṇḍālaṃkāra alaṃkṛte/

(13) sarvatathāgatādhiṣṭhite bodhaya bodhaya/ bodhi bodhi budhya budhya/
saṃbodhaya saṃbodhaya/ cala ca

(14) la calantu mahārāja/ śrīśubhākaradevasya ca śyā[ma]devyā

sarvapāpa(sic)varaṇāni sarvapāpa

(15) vigate/ huru huru sarvaśokavigate/ sarvatathāgatahṛdayavajri[ṇi]/
saṃbhara sa[m]bhara sarvatathā

(16) gataguhyaadhāraṇimudre/ buddhe subuddhe/ sarvatathāgatādhiṣṭhite
dhātugarbha svāhā// sama

(17) yādhiṣṭhite svāhā/ sarvatathāgatahṛdayadhātumudre svāhā/
supraṭiṣṭhitasarvatathāgata

(18) [a]dhiṣṭhite huru huru hūṃ hūṃ svāhā/ oṃ sarvatathāgatoṣṇīṣa-
dhātumudre/ sarvatathā[gatadhātu]

(19) vibhūṣitādhiṣṭhite svāhā/ huṃ huṃ phaṭ phaṭ svāhā// oṃ traiyadhve
sarva[tathāgatahṛ]

(20) dayagarbhe jvala dharmadhātugarbhe/ saṃ[bhara mamā]yu[h]
saṃśodhaya pāpaṃ sarvatathāgata sa

(21) [mantausṇī]ṣavimalaviśuddhe svāhā//

(6) おわりに

日本では、『宝篋印陀羅尼』が、主に仏舎利の代用陀羅尼として用いられた。とくに鎌倉時代以後は、『宝篋印陀羅尼』を納入し、その種字である Stryi (シツチリヤ) 字⁽¹⁸⁾や、四方四仏の種字を四面に刻出した宝篋印塔が多数の作例を遺している。なおウダヤギリⅡ出土の石刻碑文に記されていた『無垢仏頂陀羅尼』の短編の陀羅尼もまた、仏塔に納入する代用舎利の機能を有していたことは注目に値する。

さらに『造像量度經』 *Pratimālakṣaṇa* の注釈である『造像量度經解』には、仏像の開眼に際して『佛頂尊勝呪』『佛頂放無垢光明呪』『正法祕密篋印呪』『菩提場莊嚴呪』『十二因縁呪』の五大陀羅尼を納入すべきことが規定されてい

る⁽¹⁹⁾。このうち『佛頂放無垢光明呪』は『無垢仏頂陀羅尼』、『正法祕密篋印呪』は『宝篋印陀羅尼』、『十二因縁呪』は「如来法身偈」と同一であるから、本石刻銘文には、五大陀羅尼のうち『仏頂尊勝陀羅尼』を除く4種が記入されていたことになる。

またウダヤギリの四臂観音像の背面に、「如来法身偈」『宝篋印陀羅尼』『菩提場莊嚴陀羅尼』が記されていたことを勘案すると、内部に陀羅尼を納入できない高浮彫の仏像が多いオリッサでは、背面に陀羅尼を代用舎利として刻出する慣行があったとも考えられる。

したがってウダヤギリⅡ出土の石刻陀羅尼は、仏像あるいは奉獻小塔の開眼に際して、仏舎利の代用陀羅尼として刻出されたものではないかと考えられる。もしこの推定が正しいなら、記入された陀羅尼の文献的性格から、出土品の用途が明らかになったことになる。また『宝篋印陀羅尼』の途中に、バウマカラ王朝の王名が挿入されていたことは、単にオリッサの仏教史にとって重要であるばかりでなく、かつて大乘仏教が栄えたアジア各地の仏教と王権を考える上でも、一定の意義を有するといえよう。

問題の石刻陀羅尼はASIの収蔵庫に収蔵され、公開されていないが、機会を見て実見し、ここに掲載したローマ字化テキストの読みを検証したいと考えている。

平成25年度学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））「アジア各地における密教図像と文献の比較研究」の成果の一部。

- 1 このうちブバネーシュバル郊外のハリプル所在の四仏像については、“Four Buddha Statues from Haripur,” *Stupa: cult and symbolism* (Śatapitaka Series 624), New Delhi 2008 に論文を寄せ、その日本語版「ハリプルの四仏について」『密教図像』第27号(2008)も刊行された。また現地でも再発見された仏教徒カーストについては、

- 岐阜女子大学南アジア研究センター研究紀要『南アジア・アフェアーズ』No.6 (2010年)に「オリッサの仏教徒——その歴史と現状——」を寄稿している。
- 2 同学会の論文集は、オリッサ州立の Odishan Institute of Maritime and South-East Asian Studies の Sunil Kumar Patnaik 氏によって準備されているが、2014年10月現在、いまだ初校ゲラも出ていない。
 - 3 佐和隆研編『密教美術の原像』（法藏館、1982）の刊行以後、多数の研究者が現地を訪れ、調査を行ったが、ウダヤギリⅡは発掘開始が1997年と遅かったため、頼富本宏「最近のオリッサ地方の遺跡発掘状況」（1999）にも、新たな発掘が始まったことを紹介するのみで、具体的な成果は一部の研究者にしか知られていない。
 - 4 1997年から2000年までに出土した石刻陀羅尼については、現地で発掘を指揮した Bimal Bandyopadhyay: *Udayagiri-2*, New Delhi 2007, 128-137 に報告されている。しかし本稿で取り上げる石刻陀羅尼は、2001-02年の発掘で出土したので、同書には記述がない。
 - 5 *Indian Archaeology 2001-02 A Review*, New Delhi 2008, 138-194.
 - 6 大正 No.1022A, 1022B, 1023.
 - 7 P.No.141; Tohoku No.507.
 - 8 大正 No.1022A の末尾に収録される梵字転写は、浄厳の『普通真言藏』に基づいている。種智院大学密教学会『梵字大鑑』（1983）516-520 所収本等も、ほぼこれに拠っているが、不空の漢字音写から還梵したものなので問題点が多い。
 - 9 Gregory Schopen: *Fragments and Fragments of Mahāyāna Buddhism in India*, More collected papers, Honolulu: University of Hawai'i Press 2005, 314-344. なお Schopen は石刻陀羅尼を、カタック所在のオリッサ地域博物館 Provincial Museum of Orissa 所蔵とするが、筆者が最初に石刻陀羅尼を目撃した2008年以来、この作品はブバネーシュバルの州立博物館に陳列されている。また Schopen は『菩提場莊嚴陀羅尼』の原語を *Bodhigarbhālaṅkāra* としているが、『宝篋印陀羅尼』の字句と漢訳の「菩提場」は明らかに *Bodhimaṅḍālaṅkāra* を支持している。
 - 10 Schopen 2005, 306-313.
 - 11 佐和 1982, 83 に挿図 77「尊像背面の梵字銘文」として紹介されているが、長年雨ざらしになっていたため、銘文の右半分が判読困難になっている。
 - 12 なおバウマカラ王朝の後妃の名は、かなり明らかになっており、そのうち全員が devī の称号をもっているが、ここに言及される人物は、他の史料からは同定できなかった。
 - 13 頼富本宏『密教仏の研究』（法藏館、1990）142-143.

オリッサ州ウダヤギリⅡ出土の石刻陀羅尼について

- 14 P. No. 206; Tohoku No.599.
- 15 『佛頂放無垢光明入普門觀察一切如來心陀羅尼經』(大正 No. 1025).
- 16 大正 Vol.19, 724a.
- 17 Schopen 2005, 332-336.
- 18 これは『宝篋印陀羅尼』の冒頭に出る *namas tryadhvikānām sarvatathāgatānām* の3字目に現れる特徴的な文字 *strya* が、誤って *stryi* と綴られたものである。
- 19 大正 No. 1419, Vol.21, 951a.

A Newly Identified *Dhāraṇī-sūtra* from Udayagiri II

by TANAKA Kimiaki

The excavation of Udayagiri II undertaken by the ASI since 1997 has brought to light some new discoveries about Orissan Buddhism. Among these, a khondalite inscription found on the eastern side of monastery No. 2 (Reg. No. 70) is important since most of its 21 lines are in good condition and readable. A photograph of the surface along with a romanized transcription appeared in *Indian Archaeology 2001-02* (“A Review”). I noticed that one of the *dhāraṇī-sūtras* inscribed on the khondalite plate is somewhat similar to the *Ārya-sarvatathāgatādhiṣṭhāna-hṛdaya-guhya-dhātu-karaṇḍa-mudrā nāma dhāraṇī*, which was mainly revered as a substitute for the Buddha’s relics. There are three Chinese versions of this *dhāraṇī-sūtra* and one Tibetan translation. In addition, a Sanskrit transcription in Siddham script has been transmitted in Japan. Unfortunately, the transcription by the ASI contains several errors since they were not aware of the original *dhāraṇī*, and this seems to have hindered the correct identification of the text.

Another khondalite plate inscribed with a *dhāraṇī-sūtra* had previously been discovered in Orissa and is now exhibited at the State Museum in Bhubaneswar. It has already been identified by G. Schopen as the *Bodhimaṇḍalālāṅkāra nāma dhāraṇī*. The *Ārya-sarvatathāgatādhiṣṭhāna-hṛdaya-guhya-dhātu-karaṇḍa-mudrā nāma dhāraṇī*, on the other hand, has been discovered neither in Orissa nor anywhere else on Indian soil, although one example has been discovered in Sri Lanka.

It is worth noting that the name of Śubhākaradeva, a king of the Bhaumakara dynasty, has been inserted in the *Ārya-sarvatathāgatādhiṣṭhāna-hṛdaya-guhya-dhātu-karaṇḍa-mudrā nāma dhāraṇī*. This is the first concrete evidence of a relationship between the Bhaumakara dynasty and Udayagiri.

In this paper, I compare the inscription with the extant Chinese and Tibetan versions of this *dhāraṇī-sūtra* and consider the significance of this discovery for the history of Orissan Buddhism. For further details, reference should be made to the romanized transcription of the inscription on pp. 156–158.